

<コープサウス2022>米・バングラデシュ 戦術空輸の相互運用力を強化

Cope South 2022 enhances U.S., BAF tactical airlift interoperability

March 7, 2022

By Tech. Sgt. Christopher Hubenthal
374th Airlift Wing Public Affairs

[バングラデシュ]ダッカ発—2月19日から26日にかけて行われた演習「コープサウス2022」で、米軍第36遠征空輸中隊の空兵70人以上と米宇宙軍の隊員1人が、バングラデシュ空軍の隊員約300人と共に、両軍の相互運用力の評価と向上を図った。

太平洋空軍が年2回主催するこの二国間戦術空輸演習で、米空軍とバングラデシュ空軍は合同で戦術空輸を実践した。

第36遠征空輸中隊のミッション指揮官マデリン・アトキンソン大尉は、地域の安定を維持・強化するために「コープサウス」のような二国間演習がとても重要である理由を次のように説明した。

「自分たち(のスキル)を向上させ、同盟国やパートナーとより強い絆を持つことで、共に進歩できる。我々は、こうしてさまざまな場所へ出向き、他の国々ではどのように運用し、どう融合できるかを習得しているので、いつ何が起ころうと準備はできている。我々は作戦方法を習熟しており、経験もある。方法を見い出すというよりも、演練の機会である」

米空軍とバングラデシュ空軍の隊員は、同演習でより良く任務を遂行するために、C-130Jの性能、乗員のリソース管理や飛行機器の用語に関するディスカッションを行い、知識や最善の実践方法を共有した。

また、参加した両軍の隊員は、パラシュート降下、高高度低降下(HALO)、低空飛行、夜間観測飛行、コンテナ輸送システム空中投下などを実践した。そのディスカッションや訓練を通じ、両空軍は戦術、技術、手順を互いに共有できた。

第36遠征空輸中隊上級下士官主任のポール・ビエイラ曹長は、「バングラデシュ空軍から学べることがある。彼らは我々とは異なった方法で訓練を行い、作戦方法も我々とは異なる。こうして多様なアイデアを交換できることは、我々の隊員にとって実に有益である。我々は、こうしたアイデア交換から得るものを糧にし、個人レベルの関係を築きたいと思っている」と続けた。

パートナー国と共に戦術空輸訓練を行えることは、両空軍の隊員にとって極めて貴重な機会だった。

バングラデシュ空軍第101特殊飛行部隊司令官シャムム・レザ大佐は、「我々は作戦に対し同じ理解を持っている」と述べ、「相互の交流を通じて、整備面、そして運用面について意見交換し、多くのことを学ぶことができた。それは両空軍、両国の関係を強化する。太平洋空軍、アメリカ空軍、そして素晴らしいパフォーマンス(運用力)を見せてくれた第36遠征空輸中隊の仲間感謝したい。彼らが(自分達とは違う)アメリカ軍の空兵であることを感じず、グローバルな空軍メンバー同士だと感じられた」とコメントした。

「コープサウス」のような演習は、地域安定を維持するために太平洋空軍がパートナー国と連携する能力を強化する。第36遠征空輸中隊司令キラー・コフィー中佐は、こうした二国間演習は、(任務の)優先事項を確実に達成するために重要であると次のように述べた。

「我々は“友”なくして何もできない。同じように、パートナーや同盟なくして何もできない」「自由で開かれたインド太平洋という考え方は、ある種の排他的なクラブではなく、ひとつの概念であり、主権、安全、自由、尊厳、開放感といった特定の価値を尊重する人間の感情だ。こうした価値観を共有することで、一定の安全や平和がもたらされる。我々一同がこのような価値観のもとに集い演習することは、実践的にこの地域の強化を図る機会となる」

「コープサウス」は、自由で開かれたインド太平洋を推進するために、米軍とバングラデシュ軍が人道的空輸・災害救援や国境を越えた脅威や危険へ対処する共同作戦遂行能力の向上を図る継続的な取り組みであり、今回で13回目となる。

